

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 清水さやか

サミュエル・ベケット (1906-1989) はアイルランド出身の劇作家、小説家で、フランス語と英語の二つの言語で創作活動を行った。とりわけ、20世紀小説に革新をもたらした中期小説三部作(『モロイ』(1951)、『マロウンは死ぬ』(1951)、『名づけえぬもの』(1953))、不条理劇の傑作と評される『ゴドーを待ちながら』(1952)によって知られている。先行研究が多く、現在もなお世界中で分析されているこれらの作品について、本論文は苦しみの表現を正面から論じることで、読解の新たな道筋を切り開いた。内戦時のサラエヴォで上演された『ゴドーを待ちながら』が大きな共感を呼ぶなど、ぱっとしない人物たちによる、ほとんど何も起こらないベケットの作品空間が、苦痛と悲惨のさなかにある人々になぜこれほどまでにアピールするのか。研究者がこれまで論じてこなかったこの問題に切りこんだ点で、本論文は審査員から高い評価を受けた。

全体は8章で構成されているが、「受難」、「受動性」、「共苦」等、作品分析のための概念を詳述した第1章から第5章までと、それらの概念を通して具体的な作品解釈を行う第6章から第8章までの二つの部分に大きく分けることができる。前半部分では、特に共苦(compassion: 同情、哀れみ)という言葉をめぐる、独自の考察が展開されている。その考察によれば、共苦を、文字通り「共に苦しむ」と捉えることで、ベケットの想像世界が生みだされている。一人称で語られる小説の一語一語に苦しみの感覚が刻印されているだけでなく、苦しむ「私」の傍らにもうひとりの「私」がいること、「共に」苦しむ伴侶を想像することで苦痛に耐えようとしている所にこそ、ベケット作品の特色があるというのである。ただし、分裂した自己の片割れに哀れみを抱くものの、その哀れみには行き場がなく、失敗が運命づけられている。ここに作品世界を展開させるダイナミズムがあることが、論文後半部の作品解釈によって明らかになることになる。

きわめて精彩に富んだ最後の三章において、『モロイ』ではまだ二人の人間として表象されていた自己分裂が、『マロウンは死ぬ』ではホムンクルスという無数の小さな人間となり、『名づけえぬもの』ではもはや人間の形を取らず、分裂した自己が虫(ワーム)として表象される過程が追跡されている。カフカの『変身』とは異なり、ベケットの蠕虫は、言葉という象徴体系に入り込めない、前記号作用の領域でのたうっている自己の姿を捉えている。言葉を話す存在として自己を定立できない、非言語の領域にまで自己の解体を生きようとするベケットの探究を、本論文は平易な言葉でたどり直している。

審査では、共苦のもつ宗教的意味合いに関する議論の必要性、自我論の枠組みで引きあいに出されるデカルト理解の不十分さなどが指摘された。しかし、自己の内部での分裂を語っているのに、読者がなぜその苦しみに共感できるのかという問題を正面から扱い、明晰な文章で論じ切った力量を高く評価し、審査委員会は本論文が博士(文学)の学位にふさわしいものと判断する。